

B I Mのデータ流通を実践的に学ぶ

日大生産工学部で特別講義 B I M E O・日積協と民間企業が協力

千葉県習志野市の日本大学生産工学部津田沼キャンパスで、建築のデジタル化に関する特別講義が実施された。建築工学科の2年生約200人が、B I Mでつくった建築物の情報を、積算、施工管理、維持管理の工程で活用する実例を学んだ。設計段階や施工段階に限ったB I M活用ではなく、一連の建築ライフサイクルの中でデータがどのように利用されているのかを教える点が特徴だ。

建築業界で急速に進むデジタル化に対応できる人材育成が目的。川上から川下に向かう建築情報の流通を学ぶ大学講義は珍しいという。

B I M教育と実務の連携を重視するB I M教育普及機構（B I M E O）が企画し、日本建築積算協会（日積協）が協力。協栄産業とN e x c e e d、F Mシステムの3社がソフトウェアの提供と講義のサポートを担った。

特別講義は同学科の「建築コンピューター演習」の一環として実施した。B I M E O理事で日積協副会長を務める森谷靖彦氏が企画段階から参画し、演習の担当講師も務める。



3 Dモデルと積算の連携に関する講義

19日の講義では、日積協が建築積算に関する基礎的な知識を『カレーの作り方』に例えて分かりやすく解説した。

協栄産業は、同社開発の建築積算ソフト『F K S』を活用したB I M連携積算を具体的な操作を交えて



森谷氏（左）と鎌田氏



説明し、B I Mデータと積算の連携による実務の効率化を伝えた。

また、設備施工管理ソフト『B I M X D』を提供しているN e x c e e dは、現場での活用事例や施工段階のD X（デジタルトランスフォーメーション）の可能性を講義。F Mシステムは、維持管理に特化した『F M－I n t e g r a t i o n』を活用して竣工後の建物管理の効率化について解説した。

今回の特別講義に協力した建築工学科の鎌田貴久専任講師は、「企業と連携した授業を積極的に展開して、社会で即戦力として活躍できる人材育成に力を入れている」と同学部の教育方針示した上で、「B I Mの活用は広がっているものの、中心的要素といえる「I n f o r m a t i o n（情報）」が建築ライフサイクルの中でどのように利用されるのかを大学で教える機会がない。講義を通して、設計、



講義の前半では、積算基礎をはじめ、設計B I Mと積算、施工B I Mと施工管理、維持管理段階のB I MとF Mの関係を解説した

施工に限らない建築の幅広い仕事を知ってもらい、実務の中でB I Mが何を効率化してくれるのかを学んでほしい」と狙いを話す。

講義は、学生からのフィードバックを交えて改善を続けていく方針だ。

これまでに、B I M E O、日積協、協栄産業は、東京工芸大で、B I Mモデルを活用したコストシミュレーションなど実務を通して建築積算の知識と技術を学ぶ講義を展開してきた。森谷氏は「積算や施工管理、維持管理など建築に関わる多くの分野を実践的に学べる機会が増えれば、建築業界で働く社会人の学び直しにも役立つのではないかとし、大学と企業が連携した取り組みをさらに拡大していく考えだ。

デジタル人材を育成

